

発掘調査の概要

甘樫丘東麓遺跡の調査(飛鳥藤原第177次)

甘樫丘は飛鳥川の西岸に位置する丘陵で、『日本書紀』には、皇極天皇3年(644)に蘇我蝦夷・入鹿の邸宅が営まれたことが記されています。

丘陵東麓の谷におけるこれまでの調査で、7世紀前半から8世紀初頭にかけて、大規模な造成をともなう活発な土地利用がおこなわれていたことが判明しています。今回の調査は、これまでの調査地より北に位置する小さな谷と、その西側の斜面と尾根の上でおこないました。斜面と尾根上の調査区では遺構は確認されませんでした。谷部では古代の遺構を確認しました。調査は2012年12月に開始し、途中2か月間の中断を経て、2013年11月に終了しました。

調査の結果、谷は本来北西から南東に傾斜する地形でしたが、高いところは地面を削り、低い部分は埋め立てて広い平坦面を造るという大規模な土地造成をおこなっていたことがわかりました。そして、平坦面に掘立柱建物や、溝等を造っていました。これらの具体的な利用方法はわかりませんが、数回の遺構変遷が確認できました。谷を埋め立てた土に含まれる遺物と、廃絶後に遺構全体を覆う土に含まれる遺物が、いずれも7世紀中頃までのものであることから、この谷は7世紀中頃の短い期間のみ使用されていたとみられます。

また、このような小さな谷でも大がかりな土地造成をおこなっていたことから、これまでの調査とあわせ、甘樫丘では7世紀代に広い範囲で土地開発がなされていた可能性が高まりました。今後、甘樫丘の造成の全体像があきらかになることが期待されます。

(都城発掘調査部 大林 潤)



調査区全景(北東から)